

鉄道開業150周年 鉄道が登場する千葉の文学

書名	著者	出版情報	登場する路線・駅	請求記号
総武鉄道	正岡 子規	増進会出版社 2002	総武鉄道	91868/マシ 3/8 「子規選集8」収録
総武鉄道（現総武本線）市川ー佐倉間が明治27年（1894）開業。当時新聞記者だった正岡子規は、総武鉄道を利用し四街道、佐倉を訪れた。				
分家	伊藤 左千夫	岩波書店 1977	千葉駅、成東駅、稲毛駅	91868/伊 1/4 「左千夫全集第4巻」収録
明治時代の農村での人々の暮らしや結びつきについて書かれた小説。中流農家の実態や、上総の農村風景、農民の暮らしぶりが詳しく描かれている、成東が舞台の農民文学。東京から実家へ帰る際、稲毛、八街の停車場の様子、成東停車場で下車のシーンがある。「東京日日新聞」明治44年掲載。				
東京近郊一日の行楽	田山 花袋	博文館 1923	内房線、総武線、常磐線、成田線、房総線	KY915/TA98/(中) (個人貸出不可) ※国会図書館デジタルコレクションにて閲覧可能です。
東京近郊を汽船、汽車、乗合自動車、馬車を使った日帰りもしくは一泊二日の小旅行を描く。千葉の沿線は、内房線、総武線、常磐線、成田線、房総線などが登場する。当時は、「両国から汽車で銚子まで5時間」だった。ちなみに、花袋は銚子好きで「海岸はどこがいいか？」と聞かれば、迷わず銚子と答える。」と書かれている。大正5年（1916年）発表。				
清澄詣	荻原 井泉水	ぎょうせい 1994	勝浦、房総線、勝浦	C986/1/「ふるさと文学館第13巻」収録
大正9年（1920年）、井泉水は母が病気で寝込んだため代参を乞われ、病気回復を祈願するため清澄寺を訪れた。冒頭、房総線の終点勝浦駅で下車。「担ぎ商人、保線工夫、漁師達と前後して改札口を出て、待合室の売店で埃だらけの絵葉書を買う」				
驛	柏原 兵三	なのはな出版 1995	成東駅	9136/KA77/「短い夏」収録
大正13年当時、房総の成東駅（作中では鳴戸駅）の駅長をしていた父親の姿を、父親の部下からの書簡や、回想によって浮かび上がらせ、成東の町の様子も描かれる。				
指導物語 ある国鉄機関士の述懐	上田 広	なのはな出版 1995	総武本線、成田線	C936/2/1 「房総の近代文学1」収録
房総半島の鉄道を舞台に、ベテラン機関士と機関士見習いの交流と成長の物語。「中央公論」昭和15年掲載。昭和16年映画化され大ヒットした。映画の蒸気機関車C58 217は、本作ゆかりの路線の一つである総武本線沿線の旭市にある「中央児童公園（西の宮公園）」に保存されている。				
十五号車の男	黒羽 英二	河出書房新社 2009	成田駅、成田山門前駅	9136/カ 3/
鉄道廃線跡に魅入られた作家の怪奇と幻想の短篇集。その中に収録されている「成田」は、著者の幼少期（昭和14～19年頃）、成田を舞台に成田駅とその周辺について詳しく語られ、巻末の創作ノートには、成田電気軌道、成田鉄道などの概要が、沿線図や時刻表とともに載っている。				
或夜	永井 荷風	岩波書店 1994	市川駅	91868/カ 1/19 「荷風全集 第19巻」収録
市川駅の待合所からはじまる短篇。改札口付近の様々な人の様子や、構内の模様の描写あり。「勲章」1947（昭和22）初出。				
鄙の長路	上林 暁	筑摩書房 1978	房総線、小湊鉄道、朝生原駅	C986/1/「ふるさと文学館第13巻」収録
昭和24年頃五井から小湊鐵道に乗って上総中野の鉱泉場（養老館）に、男が一人出かけていく私小説。「気動車は、煙を吐いてやってきた。機関車の後に貨車がつづき、最後部に、二輛の客車がつながれていた。」				

書名	著者	出版情報	登場する路線・駅	請求記号
買出し	永井 荷風	岩波書店 1994	総武鉄道、船橋	91868/カ 1/20「荷風全集第20巻」収録
戦後の食糧難の時代、船橋近くを背景に買出しの様子が描かれた短編。船橋と野田の間を往復している総武鉄道の支線電車を買出電車と表現し、乗客間では、船橋の駅には刑事が張り込んでいて、持ち物を調べているという話が交わされる。「中央公論」昭和25年1月号初出。				
房州白浜海岸	林 芙美子	ぎょうせい 1994	房総線、館山	C986/1/「ふるさと文学館第13巻」収録
両国から房総線にて、館山から白浜あたりを巡る随筆。房総線は「汚いと聞いていたが、クッションはビロード張り、天井は白く思いの外清潔」で、館山駅は「古びた、かなり大きい駅」と描写あり。「文藝春秋」昭和26年3月号掲初出。				
房総鼻眼鏡	内田 百閒	筑摩書房 1995	旧千葉駅、房総西線	908/3/10「新・ちくま文学の森10」収録
千葉～成東～銚子～成田～千葉廻りと、千葉～木更津～館山～安房鴨川～大原大網～千葉廻り。千葉を鼻柱とした鼻眼鏡になっている、鉄道紀行文。「文藝春秋」昭和29年4月初出。				
砂漠の花	平林 たい子	潮出版社 1977	成田鉄道多古線	91868/ヒ1/7(西)「平林たい子全集7」収録
学校を卒業して上京してからの波乱に満ちた半生が書かれた自伝小説。文学者仲間と共に、銚子犬吠埼海岸を訪れた際、多古と八日市場をつなぐ軽便鉄道について「汽車がカーブするとき用に足を足して、また走って乗る」「そんな遅い汽車なら、歩いたほうがはやくありませんか」との会話が交わされている。「主婦の友」昭和30年1月初出。				
九十九里浜	松本 清張	文藝春秋 1973	九十九里町、九十九里鉄道、東金駅	91368/マ 1/36「松本清張全集36」収録
突然舞い込んだ手紙から、異母姉の存在がわかり主人公は九十九里まで逢いに行く。千葉から鴨川行に乗り換え、大網を通り東金で下車するまでの描写あり。「新潮」昭和31年9月号初出。				
哭	李 恢成	河出書房新社 1980	総武流山電鉄	9136/I11/「流民伝」収録
主人公と在日朝鮮人の妻は、義両親が暮らすN市(流山市)へ、総武N線(総武流山電鉄)で訪れる。1961年頃と、8年後1969年の流山電鉄の風景が描写されている。「二台連結のチンチン電車は終着駅のNまでわずか6キロ足らず」だったのが、三台連結に変わり、無人駅も減ってベッドタウン化してきた様子がわかる。				
連環	松本 清張	文藝春秋 1972	鋸山、浜金谷駅	91368/マ 1/12「松本清張全集12」収録
完全犯罪をもくろむ男が、追跡者により自滅していく姿を描くサスペンス。物語の舞台となる鋸山へ電車で向かう。「日本」昭和36年1月初出。				
大河の九姉妹	館 のり子	みやび出版 2008	銚子電鉄、銚子外川	9136/タ 23/
銚子に生まれ育った九人の姉妹が、戦前から戦中、そして戦後の60年、各々がたどった数奇な足跡を克明に描いたノンフィクション。冒頭、昭和63年頃と思われる銚子電鉄終点、外川駅が登場。				
ラブ・レター	浅田 次郎	集英社 1997	千倉、内房線、千倉駅	9136/ア 4/(中)「鉄道員(ぼっぼや)」収録
偽装結婚をした会ったこともない妻との心の交流を描く。妻の遺体を受け取るため、男が千倉を訪れる。内房線の車内の様子や千倉駅の描写がある。				
我もまた渚を枕 東京近郊ひとり旅	川本 三郎	晶文社 2004	京成線、銚子駅、船橋、我孫子駅など	9156/カ 2/
向かうは、千葉、埼玉、神奈川など東京近郊16の町。気ままにぶらぶら街歩きエッセイ。船橋、我孫子、市川、銚子、千葉などが、電車の歴史と文学と町並みを絡めて盛りだくさんに語られる。				

※請求記号欄内に(中)、(西)表記がある資料は、中央、西部図書館所蔵です。取り寄せができます。